

電子メディア社会における階級（闘争）の構成について—マルクス主義政治思想史の観点から—

都丸雅樹

序 失われた闘争を求めて

我々は今日、明らかに資本主義的経済システムの矛盾が剥き出しの形で現れているのを目にする。もはや言うまでもない貧富の差の拡大と反復される恐慌状態はもとより、労働対象とされてきた自然、生産や再生産の基礎となるところの自然の限界も現実的な形で現れてきている（そして現在、あらためて古典的な「戦争」もここに付け加える必要があるだろう）。こうした事態に対して、散発的であれ持続的であれ、さまざまな形での抵抗運動が生じてきていることを、我々は疑い得ない。それは一つの純然たる事実としてある。反グローバリズム運動、環境主義、新しい社会主義の模索、そして古いマルクス主義の運動のなかでは放逐されてきたアイデンティティをめぐる闘争も今日では政治の表舞台で盛んに行われている。

我々はこれらの闘争とそれがもたらす諸成果を決して否定しはしない。だが、本論文が根底的な問題としたいことは、これらの運動が資本主義という経済構造と奇妙なすれ違いを続けているということ。それが資本主義を変革するという一つの運動にうまく接続されていないように思われるということだ。そしてさらに重要な点は、今日において全体主義的な傾向が大きな力をもちつつあるということである。何故これほどの矛盾を抱えながら、人は全体主義にのまれるのか。我々はこうした状況に対して次のような問いを發したい。つまり「運動」は如何にして生じてくるのか、人は如何にして「革命的な集団」、「多様なものの運動体として展開されるのか」。そしてそれらが如何にして「資本主義メカニズム」を変革することができるのか、という問いである。我々はこうしたことの手掛かりとして、「階級闘争」を考察することにしたい。

その際、第1章においては伝統的なマルクス主義の「階級闘争」概念、つまりは経済構造に依拠したそれと、フロイト左派によるその拡張の試みを手短かにではあるが図式化する。続く第2章においては、現代における新しい階級概念としてA.ネグリとM.

ハートによる「〈帝国〉」と「マルチチュード」をめぐる議論を批判的に考察する。そしてこれらの批判的考察に基づいて、新しい運動（我々はこれを新しい階級概念として提起したい）の場とその方向性を提示することを試みたい。

その理路を簡単に提示するならばこうだ。マルクス主義による経済中心的な階級概念だけでは多くの運動を取り逃すことは事実であり、フロイト左派が分析したような情動的な社会分析が必要なことは事実である。しかし多くのフロイト左派は重要な分析を残しているとはいえ、彼らは多くを旧来の精神分析や疎外論に負いすぎており、特に「闘争＝運動」概念の欠如が彼らには目立つ。そこで今日的なネットワーク的で情動的な労働に依拠した階級概念として「マルチチュード」を提起したネグリ&ハートらの方向性自体は正しいように思われるが、その一方「〈帝国〉」の力の増大が、ある種直接的にマルチチュードの力能の基盤になるという彼らの考察には問題があると考えられる。それ故我々は現代の電子メディア社会とそこで行われる「労働」や「コミュニケーション」に注目し、彼らの概念を再定式化することで、新しい階級闘争概念の方向性を提示することを試みたい。

第1章 マルクスとフロイトはいかにして出会うのか—下部構造と情動の交錯—

マルクス主義の階級概念は今日、あまりにも古びたものとして扱われ、政治的な議論の際にマルクス主義的な言説が表舞台に立つことは少なくなった。しかしながら資本主義経済が引き起こす様々な社会的諸矛盾が噴出するたびに、時たま彼の名は呼び戻され、その批判の理論が改めて社会に向けられる。しかし「階級闘争」や「運動」が問題になるとき、このようなテキストは一樣に饒舌ではなくなってしまふ。

だが20世紀においてあれほどの「運動」を率いてきた、まさに政治運動としての「マルクス主義」とは何であったのか。そしてその運動が根本において依拠してきた「階級」、そして「階級闘争」概念とは何であったのか。本章においてはまずそれを中心的に考察する。その際はじめに、経済構造に立脚した形での階級闘争概念を図式化し、その後フロイトとマルクスの接合を目指したフロイト左派の議論を図式化したい。そのことによって、政治運動的な観点から見たマルクス主義それ自体の流れと階級闘争概念の変遷、そしてそれらの限界点を批判的に示すことができるだろう。

第1節 「万国の労働者よ、団結せよ」とはいかなる呼びかけなのか

マルクスは『共産党宣言』の冒頭を、あまりにも有名な次の言葉からはじめた。「今日まであらゆる社会の歴史は、階級闘争の歴史である」¹。ブルジョアと封建君主、ブルジョアとプロレタリアートの闘い等々が、まさにある時代における社会の歴史だと彼らは宣言する。歴史はこれらの闘争によって常に変化してきた、と。ここでは歴史にまつわる詳細な議論に入っていくことはしないが、マルクス&エンゲルスは資本主義社会に関して次のように述べている。「封建社会の没落から生まれた近代ブルジョア社会は、階級対立を廃止しなかった。この社会はただ、あたらしい階級を、圧政の新しい条件を、闘争の新しい形態を、古いものとおきかえたにすぎない。[／]しかしわれわれの時代、すなわちブルジョア階級の時代は、階級対立を単純にしたという特徴をもっている。全社会は、敵対する二大陣営、たがいに直接に対立する二大階級—ブルジョア階級とプロレタリア階級に、だんだんとわかれていく」²。こうした前提が後に東西に世界を分断したことは周知の事実である。後にドゥルーズ&ガタリが明確に述べているように、「レーニンとロシア革命の甚大な成果とは、客観的存在または利害に応じた階級意識を形成し、その結果、資本主義の国々に階級の二極性の認識を受け入れさせたことである」³。資本主義はそれ自体の生産過程の結果として不可避免的に物質的な利害の対立を生じさせ、階級を二極化させる。

マルクス、そしてレーニンの革命にまで至る偉大な運動の基礎はおおよそ上述のような発見に基礎付けられているといて差し支えない。しかし、なぜ資本主義は階級を二極化するのだろうか。マルクスは剰余価値の生産、端的にいうと資本が拡大していくプロセスを次のように捉えた。「労働は、力の発揮としては、生命力の支出としては、労働者の人格的活動である。しかし、価値形成者としての、自己自身の対象化過程に従事するものとしての労働者の労働は、彼がいったん生産過程に入ってしまうと、それ自身、資本価値の存在様式となり、そこに合体されてしまう。それゆえ、この、価値を維持し新価値 (Neuwert) を創造するこの力 (Kraft) は資本の力なのであり、それゆえこの過程は資本にとっては自己増殖の過程として現れるのである。しかし、自ら価値を創造しながらそれを自分自身にとって疎遠な価値として創造する労働者にとっては、それはむしろ

労働者の貧困化 (Verarmung) の過程として現れる」⁴。労働者は自由な存在として自らの労働力を自由に売買する。それ故にその労働行為、契約の過程はあたかも彼の個人的な行為のように見える。しかし労働者の労働は、資本主義的に商品を生産する過程において決して単一なものではない。それは資本の生産過程の中に組み入れられるや否や一つの膨大な合力として現れ、莫大な剰余価値を生み出す。この莫大な剰余価値の根源が結局のところ労働者個人に帰せられるとしても、それは彼らに疎遠な力としてしか存在しない。なぜならその新価値は、資本家によって占有されているからである。それ故に資本主義における貧困の問題を、端的に労賃の問題であるとか、資本家自身の非倫理的な態度に求めることはできない。マルクスが正当にも言っているように、「実際、労働者に対する資本家の支配は、労働者に対して自立化するようになった労働諸条件の、労働者自身に対する支配でしかない」⁵。個人としての資本家も労働者と同様に、資本主義生産過程においては駒でしかない。「資本家自身は資本の人格化 (Personifizierung) としてのみ^{ゲバルト}権力の保有者である」⁶。

だからこそマルクス主義的な理論においては経済構造の分析が第一義的な重要性をもち、実践においてはその変革こそがもっとも狙われるべきものであるとされる。それは様々な毀誉褒貶を経ながらも、様々なマルクス主義者が自身の中心的なテーゼとして続けたマルクスの次のテキストに象徴されている。

「人間は、その生活の社会的生産において、一定の、必然的な、かれらの意志から独立した諸関係を、つまりかれらの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係を、とりむすぶ。この生産諸関係の総体は社会の経済機構を形づくっており、これが現実の土台となって、そのうえに、法律、政治的、上部構造がそびえたち、また、一定の社会的意識諸形態は、この現実の土台に対応している」⁷。無論、こうした議論は最悪の場合経済決定論に陥りかねないし、マルクスはそのようには考えていなかったという批判は十分に成り立つ⁸。しかしここでは論文の目的上そうした細部には立ち入らず、少なくともマルクス主義の根本的な認識においては、(様々な上部構造との連関の中で重層的な決定が存在するという留保をつけつつも)「(経済的)生産様式による最終審級における決定」⁹を認めているということだけ確認しておきたい。

つまりマルクス主義の階級概念とは、経済的な諸対立に基礎付けられ、階級意識はその下部構造に基づく歴史的認識でなければならず、実践とは経済的な変革を目指すという意味で^{ラディカル}根本的でなければならないのである。だがここで立ち止まってみると、マルクスやエンゲルスらの見ていた資本主義の最前線、端的に言えば極度に沈められたイギリスの工場労働者が現実的な運動の担い手となっている間は、階級意識や上部構造についての考察はそこまで重要視されていなかったし、それでよかったのだということもできるだろう。なぜなら工場労働者は、理論は理解していなくとも現実的貧困に対する反抗心を有しており、それをもとに現実的な運動も生じていたからだ。根本的な重要性をもって階級意識と組織論が議論の俎上にあげられるには、ロシア革命とレーニンを待たなければならなかった。

レーニンはロシアで現実に展開される革命運動のさなかで、大別して二つの考えを必要としたように思われる。一つには高度に発展した資本主義、彼が「帝国主義」と名付けた段階における資本の国際性と大資本による世界分割の普遍的な認識。そしてもう一つはロシアの特殊性とロシア革命の任務から生じる労農同盟に象徴されるような団結の構築と、前衛党の重要性の自覚である。この二つの考えは相互に関連しており、そのどちらもがレーニンの政治的実践と深くかかわっている。

レーニンは「帝国主義とは、独占と金融資本との支配が成立し、資本の輸出が顕著な意義を獲得し、国際トラストによる世界の分割がはじまり、最大の資本主義諸国による地球上の全領土の分割が完了したというような発展段階における資本主義である」¹⁰という下部構造的認識を提出する。この認識は、マルクス&エンゲルスも主張した闘争の国際性を再び要求するものであることは疑い得ない。その意味でレーニンは下部構造の認識の重視、国際主義の強調においてマルクス主義に忠実である。しかし一方で、彼は純粋な意味でのプロレタリアート概念、つまり資本主義の最前線で、最もその矛盾に苦しむ工場労働者こそが革命の主体になるという考えを拡張する。これはロシアの後進性、すなわち労働者の圧倒的多数が農民であるという特殊性も加味されてのことだが、レーニンは農民のプロレタリアとの結合を主張する。「農民蜂起が成功するためには、それは目的意識をもって準備されなければならないし、ロシア全国をまきこみ、都市労働者と同盟するものでなければならない」¹¹。すべての根本問題が経済構造＝世界

的な帝国主義に起因するのであれば、個別具体的な闘争は統一してその変革を目的とせねばならないし、その為に団結しなければならない。これはある意味で一国内での国際主義であるといえる。事実上これによってレーニンは、階級をすべての資本主義における被抑圧者にまで拡張するのである（無論、労働者階級の中心性が廃棄されたわけではない）¹²。

しかし個別具体的な闘争を、統一した革命運動へと向かわせるためには、それらを統一する組織が必要である。そしてその組織こそが統一した普遍的認識を民衆に与え（外部注入論）、すべての決定に強制力を持たせなければならない（民主集中制）。だからこそレーニンにおいては組織論が重視されるのであり、一国内でのインターナショナルとしての前衛党が、そして最終的な対帝国主義の闘いと世界革命のための党としてコミンテルン（第3インターナショナル）が重要視される¹³。以上のように帝国主義を認識した彼にとって国内に限定された運動や、体制内＝議会的な運動はほとんど意味をもたない。「国家は、階級対立の非和解性の産物」¹⁴であり、それは体制維持のための一つの道具に過ぎないからである。そして、労働者階級の闘争とはみなされていなかった第三世界や資本主義後進国での闘争なども、上記のような認識のもと革命運動の一つとして包含されることになる。それは帝国主義のなかにあつて、それに対抗する運動として組織される限りで、階級的な闘争（それも重要な闘争）とみなされなければならない（弱い環）¹⁵。

こうしてレーニン主義の誕生以降、「万国の労働者よ、団結せよ」とは、非常にクリアな意味をもつことになる。あらゆる労働者や中間層は、下部構造の諸矛盾を前衛党の指導の下に実践的に認識することで明確な階級意識を有することが可能となり、自らの抑圧の根本的な廃棄のために帝国主義との国際的な闘争に決起しなければならない、そのため一つの国際主義的な前衛党への結集のもとで闘わなければならない、と。

第2節 経済的闘争の外への視座一人々はなぜファシズムを望んだかー

レーニンの引き起こした革命が、ドゥルーズ&ガタリの言うように大きな切断を引き起こしたのは疑い得ない。しかし階級意識／闘争の問題がこれだけで解決されたわけではなかった。残された重要な問題とは次のようなものである。すなわち、人は常に階級意識に目覚めているわけではない。人の意識は

常に（マルクス主義の言葉を借りれば）ブルジョアイデオロギーによって毒されており、階級意識はそれらに対して自らに固有の真理性を示さなければならないと同時に、人が真に階級意識に目覚めるとはいかなることであるのかを定義付けなければならないのだ。

こうした階級意識の問題に関して最初に一つの大きな回答を与えようと試みたのが、『歴史と階級意識』（原著：1923年）時点でのG.ルカーチである。少し長いが、彼の階級意識の定義を参照しよう。

「意識というものは社会の全体にかかわらせてくると、人間はこの状態つまり生活状態からでてくる利害を、直接的な行動にかかわらせて完全に理解できる、とともに、また—この利害に応ずる—全社会の構造にかかわらせて完全に理解できれば、人間が一定の生活状態にあってもつであらう思想や感情などが認識できよう。したがって、人間の客観的な状態に適合する理想なども認識できることになるだろう。[...]」ところで、このように生産過程のなかの一定の類型的状態に帰せられ、それに合理的に適合する反応が、階級意識なのである。したがって、階級意識は、階級を構成する個々のひとが考えたり感じたりなどするものの合計でもなければ、その平均でもない。しかも、結局、階級全体の歴史的に意味のある行為は階級意識から規定されるのであって、個々人の思惟によって規定されたりするものではない。それはただ階級意識だけから認識できるものなのである」¹⁶。

この一見ファナティックにもみえるテキストは、それでもなお重要である。ルカーチのこのテキストの注目すべき点は、個々の労働者の有する認識や感覚と、社会の総体的な認識が架橋されている点である。個々の労働者の意識は通常部分的で独立した社会的な事象と関連付けられ理解される。しかしこうした部分的思考こそがルカーチの言うところのブルジョア思想／物象化された固定的思考＝イデオロギーなのであり¹⁷、個々の意識はルカーチ的に言えば本源的には社会的総体の表出である。そしてそうした社会的総体の連関において自らを位置づけ認識する意識が階級意識であるとされる。つまり、労働者は一つの商品として、まさに資本主義社会のうちに典型的に存在するわけであるが、労働者はこの自己認識から出発し、資本主義全体の矛盾を見抜き、それを変革する主体を担えるであろうとされるのである

（類の本質としての自己認識）。そして階級闘争は、

こうした階級意識と一体になって展開されるであろう、と。

ここで重視されているのはある種の理性であることは疑い得ない。しかしここで信頼されている理性は、ファシズムの勃興によって敗北することになる。大衆はなぜ、社会を総体的に認識し、自らの利害関係に関わる場所の合理的な意識に基づく闘争ではなく、ファシズムを選んだのか？この問いより、ある種の必然性を伴ってマルクス主義の思想史にフロイト左派的側面、すなわち精神分析が入り込んでくる。その際全面的に主題化されるのは、階級意識ではなくそれをねじ曲げる虚偽意識、イデオロギーとは何であるかという点である。

上記の問題意識から、マルクス主義へのフロイト理論の接合を最も深く志したのはフランクフルト学派を中心とする一群の思想家たちであるということは疑い得ない。その巨大な功績のすべてをここで参照し整理することなど到底不可能であるが、ある種暴力的にであれいくつかの思想家たちを抜粋し、その基本的な理論構造を図式化しよう。

フランクフルト学派の基本姿勢は、大きく分けて二つの要素から構成されている。第一に、近代的なイデオロギーを構成するものとしてのテクノロジー／メディア等への分析と批判。第二に、その解放の中軸となるような対象への分析である。この第二の点は後に詳述するとして、よりわかりやすい第一の点を先に示しておこう。例えば60年代に新左翼から絶大な支持を得たマルクーゼは端的に次のように宣言する。「テクノロジーの形成過程は政治的過程である。[／]テクノロジーを媒介にして、はじめて人間や自然は組織化の代替可能な対象となる。機構の普遍的な効能と生産性—機構の下に包摂されているこれらのもの—は、機構を組織している個別の利害関係をおおい隠してしまう。言いかえれば、テクノロジーは、物象化の巨大な媒介となっている。—それは最も成熟し、最も有効な形態をとった物象化である。[...]」世界は全般的な管理の素材となりつつあり、この管理は管理者をも吸収するものとなっている。支配の網の目は理性そのものの網の目になってしまい、この社会は、宿命的にその網の目の中に包えられている」¹⁸。フランクフルト学派を代表するアドルノとホルクハイマーは、シニカルに次のように述べる。「娯楽は、その中で自分自身を忘れたいたいという諦念を助長する」¹⁹。ファシズムの勃興はここで社会的必然性を有したものとして描出されることになる。それは経済的下部構造外の、様々な上部構造

(メディア、テクノロジー、或いは家族等々)によって引き起こされたある心理的構造が原因とされるのである。フロムの言うように「パーソナリティの力強い欲求にうらづけられていないような思想は、その人間の行動や全生活にたいし、ほとんど影響力がない」²⁰ということが事実なのだとしたら、まさに上部構造はファシズムへと向かうような欲求(或いは諦念でも、情動でも)を準備したのだ、と彼らは考える。

エンツェンスベルガーの言葉を借りるならば、こうした「意識産業」²¹への批判により、批判と闘争は新たなフェーズへと移行することになる。フランクフルト学派に属する思想家のなかでも極左といってもさしつかえないであろうヴィルヘルム・ライヒは、次のように述べる地点まで階級意識の概念を拡張した。すなわち、「資本主義的秩序との矛盾におちいるもの、反逆の萌芽をふくむもの、それらはすべて、階級意識の構成要素と見なされうるし、これとは逆に、資本主義的秩序と結びつき、この秩序をささえ、かためるものはすべて、階級意識の抑止要素と見なされてよい」²²。

このようにしてフロイト左派はいたるところに階級闘争を見出すことを可能にするような視座を創造し、家族装置やメディアといったものの(特に反動的な)機能を暴き出した。しかしこれらの視点が常に物質的な階級意識=利害関係の理性的な自覚を目指していたことは否定できないし、フランクフルト学派の面々が最終的には、つまり疎外からの打開策としてはルカーチ以上のものを提供できてはいないようにも思われる。そう、例えばライヒは大衆の階級意識と指導部の階級意識を区別したうえで次のように述べる。「革命的指導部は、指導が革命の利害に主観的だけではなく、客観的にも沿った活動であることを要求される」²³。混濁した階級意識は、最終的には超越的な指導部のもとに合理的=理性的に団結しなければならない。それこそがある意味では欲求の真の解放であり、虚偽意識を打破することである、と。「真実の欲求と虚偽の欲求」²⁴の二元論がここにはある。そしてそれを成し得るのは、名指されていないだけで一つの理性であることは疑い得ないのではないか?

またこのような理性は、フランクフルト学派に一定共有されるある種の自然主義にもつながっているように思える。例えば「思考する自然」として自らを捉える主観(自身の自然性を抑圧した自律的思考ではなく、自己抑圧を反省し、自己のうちにある自然を取り込み増強された主観)²⁵や、エロスのなもの

(テクノロジーによって節約、或いは性的なものに局限されてしまったが、それ以前においては多様で充足していたとされるリビド一的経験)²⁶の称揚がその典型である。確かに、フランクフルト学派は「自然」が実社会からの避難場所として機能していることをイデオロギーであるとして批判したが²⁷、彼らはある種の否定性を媒介にしてなお、真の自然=調和を前提としているという意味での自然主義、(そしてルカーチ的弁証法に基づく)理性主義の立場に立っているように思われる²⁸。

階級闘争の概念は拡張された。階級意識も同様である。しかしいたるところに階級闘争があるといったところで、事態は前進しない。ではその階級闘争は、最終的に旧来の経済闘争に従属する形で、或いはそれに達するために展開されるのか?そしてそのような試みはある種の理性によって、否定性の弁証法的貫徹によって到達されるのか?それとも指導部の理性的な強化によって、大衆への啓蒙が改善されれば事態は変わるのか?こうした答えに満足するほど、我々は安寧な時代には生きていない。こうした袋小路に対して、現代において新たに提起される階級闘争とは何であるのか。その検討の為、次章において我々はネグリ&ハートの議論を参照しよう。

第2章 マルチチュードとメディア—新しい階級闘争のための試論—

我々はここまで、階級闘争と階級意識の概念を図式化し、その流れを見ることで現代に残された諸問題を探ってきた。続く本章においてはまず、現代的な新しい資本主義メカニズム、そしてそれに対抗する主体としてA.ネグリ&M.ハートによって提起された「〈帝国〉 Empire」と「マルチチュード Multitude」という概念を批判的に考察する。そしてそれらが、旧来の階級概念に対してどれだけの切断をもたらしたのかを明らかにすると同時に、それらの概念が有する問題点を探る。そしてこうした作業を踏まえて、新しいメディア構成のもとでの新しい階級概念を提起することを試みたい。

第1節 〈帝国〉の支配に抗する有象無象—新しい階級闘争の構成—

我々はまず、新しい資本主義の体制としてネグリ&ハートらによって提起された「〈帝国〉」の概念からみていくことにしよう。この概念は、主要な労働形態が物質的労働から非物質的労働(immaterial labor)へと変化したことと深く関連付けられている。

「[...]現代の労働と生産の現場は、非物質的労働(すなわち情報や知識、アイデア、イメージ、関係性、情動のような非物質的なものを生み出す労働)のヘゲモニーのもとで変容しつつある。[...]実際には、非物質的な生産に主に携わる労働者は、世界規模で見れば微々たるものではある。[だが]ここで意味したいのは、非物質的生産の質や特徴が、他の労働形態、ひいては社会全体を変容させる傾向があるということである」²⁹。しかし「これらの新しい特徴のなかには、明らかに歓迎されないものもある。例えば、私たちのアイデアや情動、または感情が労働に投げ入れられ、そのことによってそれらを上司の命令のもとに服従させなければならないとしたら、私たちは往々にして新しい形の激しい侵害や疎外を経験するだろう。さらに、労働市場全体に広がる傾向のある非物質的労働の契約条件や、物質的な条件は、労働一般の立場をより不安定なものにしつつある。例えば、様々な非物質的労働の形態には、労働時間と非労働時間の区別を曖昧にし、労働日を限りなく延長して生活のすべてにまで広がろうとする傾向がある。また、非物質的労働には、安定した長期契約なしに、フレキシブル(複数の仕事をこなす)かつモバイル(場所を絶えず移動する)な立場をとらざるを得ないという傾向がある」³⁰。こうした労働の形態、そして新しい搾取は、古い資本主義の搾取体制とは相いれないものだ。さらにそれは古い(レーニンの)帝国とも相いれないものである。なぜなら生全体が価値産出の重要なファクターとなっているならば、(時間/空間の確定された)工場労働を基礎として考える限りこうした労働過程は明確に捉えられないし、このような労働は局所的に行われるのではなくネットワーク的に行われる以上、その価値の(搾取の結果としての)集積は必ずしもレーニンの(局所的・一極集中的)な帝国を形成しはしないからである。

むしろこうしたネットワーク的で流動的、そして非物質的な労働を捕獲するためには、価値を捕獲する装置そのものが、それに沿って変化しなければならない。だからこそネグリ&ハートは〈帝国〉概念を提起したのであり、その〈帝国〉概念について彼らは次のように述べるのである。「〈帝国〉の平滑空間においては、権力の場は存在しない。それはどこにもあるし、どこにもない。帝国はどこにもない場所(ou-topia)であり、すなわち真の非場所である」³¹と。〈帝国〉とは我々の生全体を管理し、それを資本主義的な価値産出メカニズムに従属させるような、

ネットワーク上の権力である。そして、こうした〈帝国〉に対抗するものとして、ネグリ&ハートは新しい階級概念としての「マルチチュード」を提起するのである。

では、この「マルチチュード」は一体何によって規定される階級³²であるのか?それは、新しい労働形態それ自体によってであるといえる(これはある意味でマルクスに忠実であるともいえるだろう)。廣瀬純と佐藤嘉幸の指摘するように、「ネグリ=ガタリは、コミュニズム的「労働」に集団形成の契機を見出した」³³のだ。非物質的な労働、それはネットワーク的なコミュニケーションと世界規模での協業を必要とする。「工業労働者は一つの共通の機械の周りで

(around a common machine) チームを組んで働くが、そのような労働は協働とコミュニケーションによって規定されており、労働者はそれによって能動的になると同時に、政治的主体として立ち現れてくるのが可能となる」³⁴のと同様、マルチチュードも新しい、世界規模での協業とコミュニケーションの中で初めて政治的主体として出現することが可能となる。

しかし、このような新しい主体としてのマルチチュードは、どのような闘争の場を切り拓き、いかなるテロス=目的を持つのだろうか。少し長い引用しよう。「問題はいかんにしてマルチチュードの身体が、テロス(telos)として自らを構成ができるのか、ということである。マルチチュードのテロスの第一の側面は、言語とコミュニケーションの感覚に関係している。もしコミュニケーションがますます生産の素地となり、言語的な協力関係がますます生産的な身体構成物になっているのだとしたら、言語的な感覚や意味、コミュニケーションのネットワークをコントロールすることは政治闘争の中心的課題となる。[...]ポスト近代と〈帝国〉への移行は生活世界のこのような[ハーバースの行ったような]区分を禁止し、コミュニケーション・生産・生活を一つの複合的な全体として、開かれた闘争の場として即座に提示する。理論家や科学的事務者は長い間こうした闘争の場に関与してきたが、今日においてはすべての労働力(物質的であれ非物質的であれ、知的であれ肉体的(manual)であれ)が言語の感覚をめぐる闘争や、コミュニケーションの社会性の植民地化に対する闘争に携わっている。腐敗と搾取のすべての要素は、生産の言語的・コミュニケーション的な体制によって我々に課せられている。言葉によってそれらを打倒することは、行動でそうするのと同様に急務である。もし、イデオロギーという言葉や、超越的で外部にあるような思想と言語の領域として

理解しているのであれば、これはイデオロギー批判の問題ではない。というよりも、〈帝国〉的な体制のイデオロギーにおいては、批判は直接に政治経済と生活経験両方に対する批判となる³⁵。すなわち、イデオロギーと下部構造、生活世界と労働等の区別は非物質的労働のもとに消え去り、マルチチュードはまさに有象無象の階級として現出すると同時に、あらゆる場で闘う主体とされるのである。こうした状況をネグリは以下のように端的に表現している。「資本が生全体を覆い尽くすようになるとき、生は抵抗となって現れるのです³⁶。様々な多様なものたちの全世界的協働とコミュニケーション、このコミュニズム的な労働力を、全世界的な〈帝国〉が搾取・管理一統制しようとする。その時、マルチチュードはそれらに対してあらゆる場で立ち上がるという図式。これこそネグリ&ハートの新しい階級闘争概念といえるだろう。

しかしこのような「マルチチュード」への結集は、如何にして果されることになるのだろうか。ここでネグリが階級構成／闘争の重要な要素として挙げるのは（再び）理性である。廣瀬純の指摘するように「「コモン」の再領有化とその民主的管理を目指す」構成的権力としてマルチチュードが組織されるために必要なのは、富者側に「大なる狂気」が到来することではなく、むしろ反対に、貧者側におけるのと同様に富者側でも理性が貫徹されるということなのだ。コミュニズムとは理性の楽観主義のことである…。そして、コミュニズムの実現のためにその絶対的な貫徹が貧者の側でも富者の側でも同様に求められるこの理性とは、今日、資本主義がおのれの維持のために少なくとも相対的な仕方であつて余儀なくされている資本主義それ自身の理性のことにほかならない³⁷。〈帝国〉がマルチチュードの力能の搾取によって駆動し、それを目的としている以上、〈帝国〉の機械の周りで協働し、コミュニケーションするマルチチュードの力能＝理性の貫徹は、〈帝国〉の支配を突き破るだろうとされる。〈帝国〉の力能、即ちマルチチュードの革命的な力。ここで前提とされているのがある種の「自然成長性」であることは疑い得ない³⁸。それは、ネグリ&ハートが実践論に軸を置き執筆した最新の著作である『アセンブリ』（2019年）において、マルチチュードの理性を運動の戦略に置き、知識人や党的なもの役割を戦術的なものに限定している（党と大衆の関係の逆転）ことから明らかである³⁹。マルチチュードの自然成長性への信仰＝理性の楽観主義。

だが、我々はこうした答えに満足できない。有象無象は確かにネットワークの中から運動を構成してはいるだろう。しかし現代において、それらの力はむしろファシズム的な方向に動いてはいないか（インターネットにおける反動勢力の興隆をみよ）。このような問題が、マルチチュードに重くのしかかってくる。

第2節 新しい闘争とメディア

ネグリ&ハートによる階級闘争概念への重大な貢献は、新しい労働形態の下部構造的認識に基づきつつ「〈帝国〉」と「マルチチュード」の概念を創造し、同時にそのことによって（非物質的労働の優位の発見によって）経済と経済の外部というフランクフルト学派までは共有されていた分割を廃棄し、生の全体を（フランクフルト学派等とは別のやり方で）闘争の場として提示したことにある。

一方かれらの議論には、前節末において指摘したのとは別に、もう一つの大きな欠点があるように思われる。それは彼らが非物質的労働（そこには情動労働も含まれる）を重視し、同時にそれらにとって重要なファクターとしてコミュニケーションと協働を挙げているにもかかわらず、彼らが（現在彼らが駆動する中心的な場である）電子メディアを道具的にしか捉えていないように思われる点だ。例えばネグリ&ハートらの延長線上で電子メディアを（ドゥボールの「スペクタクル論」に主眼を置き）分析したデヴィン・ペナー（Devin Penner）は、彼らを引用しつつ次のように問いを發する。「ソーシャルメディアはツールであつて、革命を促進する方法で利用することができるし、またそれによって現場での活動の重要性が奪われるということもない。マイケル・ハートとアントニオ・ネグリは、2011年の反乱を理論化した *Declaration* [邦題は『叛逆—マルチチュードの民主主義宣言』NHK出版、2013年]の中で「フェイスブック、ツイッター、インターネット、その他のコミュニケーション・メカニズムは便利だが、集団的な政治的知性と行動の基礎となる身体がともにあることや、肉体的な (corporeal) コミュニケーションに置き換えることができるものではない」と述べている。彼らにとっては、物理的に空間を占有することで生まれる感情的な関係が、占拠運動のような闘争の核心であるといえる。しかし彼らのこうした前提を受け入れたとしても疑問が残る。それら [SNS やインターネット] は具体的にどんなことに役立つのだろうか？」⁴⁰。

我々は、そもそもこのような問いの立て方それ自体が誤っていると考える。こうした見方は（電子）メディアそれ自体の形態への分析を軽視し、それによって階級闘争それ自体を抽象的にしかねないからである⁴¹。これに対し我々は、〈帝国〉がマルチチュードの力能を捕獲し、そしてマルチチュードが力能を発揮する中心的な場を電子メディア（中心的にはインターネット空間）として捉えることで、彼らの概念を再定式化することを試みたい。

事実、今日のインターネット空間はコミュニケーションと協働が量と速度ともに最も働く空間であると同時に、情動労働の主要な場となっている。それは同時に、そこでは〈帝国〉によるマルチチュードの力能の捕獲が、最も直接的な形で行われていることも意味する。主要な SNS を参照してみよう。そこでは基本的に発信のための場が提供され、人びとの創造性こそがその媒体の価値を高めている。一見これは合理的な場所であり、人びとがみたいものをみて、言いたいことをいえていると感じる限りで自由な場のように思える。だが、ここに〈帝国〉的な搾取が働いていることを見落としてはならない。第一に、メディアは人々のコミュニケーションや協働を促進すると同時に、その膨大な情報をデータとして集積する。しかしそれらの集積された情報は「従業員のポケットに入る貨幣と、企業のバランスシートの中に登記される貨幣とは同じ貨幣ではない」⁴²のと同様に、もはや同じ情報であるとは言えない。この集積されたデータからは、一つの力、ドゥルーズ&ガタリが「大数 (les grands nombres)」⁴³と呼んだような力が生じてくる。それらはマルチチュードが有していた特異性を押しつぶし、一つの画一的な情報に縮減してしまう。その結果として、あるタイプの傾向性から算出された広告、おすすめ等々が産出され、それは一つのカテゴリー、島宇宙的な閉鎖的コミュニティを構成することに貢献する。これは純粋に経済的／資本主義的な問題でもある。人々がファシズム的に閉鎖的コミュニティの中にとどまってくれること、その中で「大数」に縮約された流れに乗ってくれること。これらは彼らが、常に（定期的）あるカテゴリーの消費者となってくれることを意味する。すなわちこれは、〈帝国〉の利害と完全に一致しているのだ。

こうした事態は共通の機械の周りで (around a common machine) で起こっているのではない。それは共通の機械の中 (inside a common machine) で生じていることだ。こうした視点なくしては、我々は

単に道具的にのみメディアを捉え、それに対して corporeal なものを定立してしまう。そうではなくて我々は、すでに我々がその中にあるようなものとして、新しい社会体として規定されるような「一つの充実身体 (un corps plein)」⁴⁴としてメディアを捉えることを提案したい。そのとき、メディアで生じている集団構成とそれに伴うコミュニケーションの問題は、経済／イデオロギー、肉体／メディアの分割を超えた一つの階級闘争の問題として提起されることになる。

しかしもし仮に、マルチチュードの力能が最も直接的に発揮される場所がインターネット空間であり、〈帝国〉による力能の搾取がそこで展開されているとするならば、それは何をめぐっての闘争であり、階級はなにによって規定されるのだろうか。示唆的ではあるが、我々はこれを情動の問題として提起したい。電子メディア空間においては、集団的な協働とその産出物が、すでに人々の集団構成の原理を萌芽的な形にはあれ含んでいる⁴⁵。だがここで問題となるのは、その産出された記号なりイメージが、集団構成の重要な要素として、集団それ自体に直接的に一体化していることだ。そして、それらがネグリの言うようにある情動を形成するものであるならば、情動は集団にとって重要な要素となる。

ここでニーチェを参照することは興味深い。ニーチェは情動やパトスによって発出されるような一つの力を「Wille zur Macht (力の意志)」⁴⁶と呼んだ。これは主体的な意志というよりも、外部の様々な力のせめぎあいの結果、主体の中に情動／パトスとして発出するような力である。ドゥルーズはこうした情動性を整理し、自らの特異性を肯定するような能動的諸力と、自らを限定付け、差異を否定するような反動的な諸力とに分類した⁴⁷。もしマルチチュードの産出した記号やイメージ、それに伴う情動が、同じように二つに区分できるのであれば、そのことによってまさに、メディアにおける集団を二つの階級として規定できるのではないだろうか？一方には、〈帝国〉によるコントロールと大数に従属した、自閉的な記号を産出することで構成されるマルチチュード。もう一方には特異性を肯定するような、能動的な情動を産出する記号を産出することで構成されるマルチチュードといったように。

このようにして状況を考察することが可能になるならば、メディアにおける全体主義的傾向は、「メディアにおける階級闘争」の問題として考察されなければならなくなるだろうし、その時、経済的闘争と情動の問題は、フランクフルト学派の考えたよう

な分割された形ではなく、一体となって展開されるべき闘争として描き出されることになるだろう。

- 1 K.マルクス・F.エンゲルス『共産党宣言』大内兵衛・向坂逸郎訳、岩波書店、1951年、p. 33。
- 2 同上、p. 40。
- 3 Gilles Deleuze / Felix Guattari, *L'Anti-Œdipe: C apitalisme et schizophrénie*, Paris, Éditions de Minuit, 1972/1973, pp. 304-305. (拙訳、以下訳者名を付さない引用は全て拙訳)
- 4 K.マルクス『資本論 第一部草稿—直接的生産過程の諸結果—』森田成也訳、光文社、2016年、p. 200、傍点は原文。
- 5 同上、p. 201。
- 6 同上、p. 287。
- 7 K.マルクス『経済学批判』武田隆夫・遠藤湘吉・大内力・加藤俊彦訳、岩波書店、1956年、p. 13。
- 8 このような批判の一例として、マルクス&エンゲルスのテキスト読解から上部/下部構造の単純な二分法を批判した廣松渉『唯物史観と国家論』講談社、1989年、第三章第三節を参照されたい。
- 9 L.アルチュセール『マルクスのために』河野健二・田村俣・西川長夫訳、平凡社、1994年、p. 182、傍点は原文。
- 10 レーニン『帝国主義』宇高基輔訳、岩波書店、1956年、p. 146。
- 11 レーニン「貧農に訴える」日南田静真訳『世界の名著 52』中央公論社、1966年、p. 128。
- 12 「そして労働者階級は、あらゆる勤労者をいっさいの圧政から解放するという目標に向かって、ひろびろとした大道を進むだろう」(同上、p. 133)。
- 13 ここでは紙幅の都合上詳細に見ていくことは避けるが、レーニンの組織論に関してはレーニン『なにをなすべきか?』村田陽一訳、大月書店、1971年を参照されたい。
- 14 レーニン「国家と革命」菊池昌典訳、レーニン前掲書 (12)、p. 472、傍点は原文。
- 15 これもまたここで詳細に議論することはできないが、レーニンがマルクス主義に対して加えた変更・拡張を整理したものとして、廣松渉『マルクスと歴史の現実』平凡社、1999年、pp. 225-231を参照されたい。
- 16 G.ルカーチ『歴史と階級意識』平井俊彦訳、未来社、1962年、p. 280、傍点は原文。なお、引用文における「…」は前後の文章の省略を、[/]は原文においてそこから改行が行われていることを意味する。以下同様。
- 17 同上、pp. 49-61、pp. 154-155。
- 18 H.マルクーゼ『一次元的人間—先進産業社会におけるイデオロギーの研究—』生松敬三・三沢謙一訳、河出書房新社、1974年、pp. 188-189。

- 19 ホルクハイマー・アドルノ『啓蒙の弁証法—哲学的断想—』徳永恂訳、岩波書店、2007年、p. 292。
- 20 E.フロム『自由からの逃走』日高六郎訳、創元新社、1951年、p. 73。
- 21 エンツェンスベルガー『意識産業』石黒英男訳、晶文社、1970年、pp. 14-15。
- 22 ヴィルヘルム・ライヒ『階級意識とは何か』久野収訳、三一書房、1974年、p. 42、太字は原文。
- 23 同上、p. 169。
- 24 マルクーゼ前掲書、pp. 23-25。
- 25 R.ヴィーガスハウス『アドルノ入門』原千史・鹿島徹訳、平凡社、1998年、pp. 89-90。
- 26 マルクーゼ前掲書、pp. 91-93。
- 27 A.シュミット『フランクフルト学派—「社会研究誌」その歴史と現代的意味—』生松敬三訳、青土社、1975年、p. 79。
- 28 こうしたある種の自然主義は、浅田彰がより広いパースペクティブから、象徴秩序に対する外部的侵犯の論理として図式化したような理論と相似であるように思われる。物象化に対する自然=エロスの反抗 (浅田彰『構造と力—記号論を超えて—』勁草書房、1983年、pp. 71-93を参照されたい)。
- 29 Michael Hardt & Antonio Negri, *Multitude: War and democracy in the age of Empire*, London, Penguin Books, 2004, p. 65. □内は文意が通りやすいよう訳者が付記した。
- 30 Ibid, pp. 65-66.
- 31 Michael Hardt & Antonio Negri, *Empire*, Cambridge and Massachusetts and London, Harvard university press, 2001, p. 190. 強調は全て傍点に統一した。以下、拙訳に関しては同様。なお、ou-topia はギリシャ語の ou と英語の topia が接続されており、ギリシャ語にそらえるのであれば ou-topos とすべきであるが、原文の通り ou-topia とした。
- 32 ネグリ&ハートはこの概念を明確に階級概念として提出している。「マルチチュードは階級概念 (class concept) である」(Hardt & Negri, op. cit., p. 103)。そして次のように語られていることも重要である。「階級は階級闘争によって決定/測定される (determined)」(Ibid, p. 104)。
- 33 佐藤嘉幸・廣瀬純『三つの革命—ドゥルーズ=ガタリの政治哲学—』講談社、2017年、p. 143。
- 34 Hardt & Negri, *Multitude: War and democracy in the age of Empire*, p. 123.
- 35 Hardt & Negri, *Empire*, p. 404.
- 36 A.ネグリ『アントニオ・ネグリ講演集(下) (帝国) 的ポスト近代の政治哲学』上村忠男監訳、提康德・中村勝己訳、筑摩書房、2007年、p. 154、傍点は原文。
- 37 廣瀬純『アントニオ・ネグリー—革命の哲学—』青土社、2013年、p. 155。

³⁸ 市田良彦『革命論—マルチチュードの政治哲学序説—』平凡社、2012年、pp. 51-52を参照されたい。

³⁹ Michael Hardt & Antonio Negri, *Assembly*, Oxford University Press, New York, 2019, pp. 290-293.

⁴⁰ Devin Penner, *Rethinking the spectacle: Guy Debord, Radical Democracy, and the Digital Age*, Vancouver, UBC Press, 2019, p. 177. □ 内都丸。

⁴¹ 指摘しておくべきことだが、ネグリ&ハートの言う「非物質的労働」、情動やデータを構築するような労働は、かなり一般化された次元で語られている (Negri & Hardt, *Multitude: War and democracy in the age of Empire*, pp. 65-67) と同時に、彼らにおいてはメディアの形式等はあまり重要視されていないように思われる (例えば *Ibid*, pp. 260-261を参照されたい)。

⁴² Deleuze/Guattari, *op. cit.*, p. 271.

⁴³ 「[...] 統計的な蓄積は偶然の結果であると考えてはならない。逆にそれは、偶然の諸要素に対して働いている一つの選別の結果だといえる。ニーチェが、選別は大抵の場合大数の有利になるように働くと言ったとき、彼は現代思想にインスピレーションを与えることになる基本的な洞察をしている。じじつ彼が意味しているのは、様々な大数や大集合が先に存在し、そこから特異な線 (*lignes singulières*) を解放するような圧力がでてくるのだといったことではない。そうではなく逆にこうした大数や大集合は、個々の特異体 (*singularités*) を選別し、押しつぶし、排除し、規則性を与えるような圧力から生じてくるのだということである」 (*Ibid*, p. 410)。

⁴⁴ 「マルクスが「それは労働の生産物ではなくて、労働の自然的な、または神的な前提として現れるものなのだ」と言ったのはこの[社会体として規定された]充実身体についてである。事実、充実身体は単に生産力に対立するだけではない。それはあらゆる生産に折り重なり、生産力とその生産力の行使者たちとが分配配置されるところの表面を構成している。これによりこの身体は一切の剰余生産物を自らのものとして、生産の進行の全体と各部分を意のままに充当する。すると、この全体と各部分は、今やこの充実身体から、まるでこの充実身体が一つの準原因であるかのように発せられてくるように見えてくる」 (*Ibid*, p. 16)。

⁴⁵ これはネグリ&ハートらの議論とも一致する。例えば廣瀬前掲書、第三章を参照されたい。

⁴⁶ 一般的に「権力への意志」、「力への意志」とも訳されることがあるこの概念だが、我々はこの概念を権力へと向かう主体的な意志とは捉えないため、一貫して「力の意志」と訳す。こうした解釈

に関しては、林好雄「解説 陰謀とパロディ」J. デリダ・G.ドゥルーズ・J-F.リオタール・P.クロソウスキー『ニーチェは、今日?』林好雄・本間邦雄・森本和夫訳、筑摩書房、2002年、pp. 98-99を参照されたい。

⁴⁷ G.ドゥルーズ『ニーチェ』湯浅博雄訳、筑摩書房、1998年、pp. 43-45。

The Constitution of Class-Struggle in the Electronic Media Society: From Historical Perspective on Marxist Political Thought

TOMARU Masaki

Today we are plagued by various tragedies caused by capitalism, but we do not have an effective vision to counter them. What I would like to focus on in this paper is the growing trend of fascism in the electronic media society, especially in the Internet space. Why do people become pathologically attached and obedient to certain communities in a free communication space? Considering this question seems important for breaking down capitalism (i.e., organizing a group to do so) in the present day. To advance this argument, this paper attempts to classify Marxist theory historically. One is based on an economic perspective, commonly referred to as Marxism. The other is a left Freudian perspective based on psychoanalysis, represented by the Frankfurt School. And finally, we consider the theories of Negri and Hardt, which capture changes in contemporary forms of labor and consider new forms of class organization and capitalist domination. By charting and critically examining these three theories in their historical context, we hope to explore the problems of organizing today.

The main arguments are as follows. Marx defined "class" as a group based on economic structure, but he did not say much about how class consciousness moved toward revolution. So Lukács and others take issue with class consciousness, and by extension the left Freudians think about how ideology and the media create false consciousness, but their theories do not seem to offer valid answers about how to overcome them. Subsequently, Negri and Hardt believed that labor would spread across the whole of life as it became more focused on communication and cooperation, and that labor that would act on emotions would predominate. They believed that if the whole of life would become subject to capitalist exploitation, then the whole of life would become resistance, and the problem of misalignment between economic class and consciousness would virtually disappear. But I do not see it that way in light of the contemporary situation. I would rather define the Internet space as the primary site of labor that inspires emotion, and the quality of the results produced by the labor = communication there, i.e., the quality of emotion, is important. And by dividing the group into two groups according to these two qualities, i.e., two types of labor, I suggest that a new type of class struggle may be possible.